おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和７(2025)年
８月号
通巻 660 号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和７年８月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

「野ブドウと小びとたち」（押絵）　　奈良県田原本町　髙濱道子（峰寿）さん作品（文・８頁）

禊会での法主との座談から

現界と霊界をめぐって（下）

法主 矢追日聖と参加者たち

前号からの続きで、平成の初め頃に大倭で行われた禊会の記録を紹介します。　編集部

持って生まれたお役目

男性　私の周りに敏感な人というか感じやすい友達とかよくいるんですけれども。

法主　まあ、あんたの周りに感じやすい人ようけおんねんな（笑）。

男性　例えば話しているとなんかコロッと違う性格になって来たりするんです。この間もなんか昔のお姫さんとか出て来たりするんですよ。その人はええ人なんか悪い人なんか。ええ神さんなんかそうでないんか、見分けるのはどうやったらええのですか。

法主　そんなん見分け方って（笑）。その人なりの向き不向きでね、私やったらすぐ見分けるけどな。そんなん八百屋さんでも一緒やで（笑）。南瓜やとか茄子の作り方を全然知らん八百屋さんでも、品物見たらええか悪いか分かる、それと一緒やで。そのような識別する能力ないと分かりにくいわな。だからそういうことはあんねん。やっぱりその人に関係の深いひとつの霊体がおったら、俗にそれを守護霊やとか背後霊とかそういう言い方するけれど、そんなのがやっぱりくっついてる場合があんねん。そやから指導してくれるような霊が憑いとったら結構やけど、悪霊が憑いとったら難儀せんならん。まあ色々あるわいな、憑いてくんの。

男性　そんな人の場合は自分で勝手にかかって来たりするわけですか。

法主　それもなにかのお役目があんねん。こんな場合は守護霊というか背後霊というか、その霊界人も生きとった時代があんねんな。その時に心残りというか、したかったことがあるわけやな。それをその人にやらせようというようなことがあんねん。

男性　いわゆる生まれ変わりみたいな？

法主　そうそうそう、そんなもんや。その霊魂が思っていることをひとりの人間を通して、その人にやらせようということがあんねんな。私も今の福祉施設やってるのは、光明皇后がうるさいほど言うて来るからで、それと一緒やで。上から被(かぶ)ってくるねん。自分が心残りやから、してんかと言われてるわけや。

男性　この前もお姫さんにかかられて、どんな気分になってんやろ。

法主　もうちょっと親しなって来たら霊魂の意志伝えよるわな。なにせいと言うて来る。

男性　あんまりにもぼうっとしているからね、まあこっちから、ちょっと混乱してるからどいてくれと言うたらどうやねんて言うて見たんです。五分くらいで出て行った。

法主　そういうような真面目な霊魂はね、生きてる現在の人間がなにか喜んでくれるような仕事をさせたがってんねん。それが真面目な方やからな。

男性　友達に憑依(ひょうい)している霊のこと？

法主　それがひとつの霊界での功徳やねん。今生きてる人間が喜ぶような仕事をするとな、それだけで霊界の位置が上がってくんねん。霊界で上がるということは霊界での生活が楽になることなんですよ。霊界というのは精神的なものなんですけどね。

男性　そういうことですか。

法主　ましてその女の人やったら、この現代社会で言うたら例えばボランティア活動するとか、ああいうようなことやると喜んでもらえるわな。そういうような仕事をさせられるのと違うかな。場所はどこでしたかてかまへんねで。その子でもな、時期が来たらもっと強い指示があるはずや。

男性　だんだん尻叩かれてるみたいや。

法主　叩かれてるんか。

男性　まだそうじゃないと思うのですが。

法主　そういうのも時期というものがある。私でも生まれつきのひとつの使命持っておったかて、終戦というひとつの時期があったから、「お前の仕事はこれからや」と言われたんやけどね。時期というもんがあんねん。それまでは感じることがあったり、いろんなことが制限させられるけれども、時というもんがあんねんな。そんな子なんかでもなにかのお役目を持って生まれてるやろうと思うけどな。せやけど、あんたのぐるりの人は色々ややこしいのが多いねんな（笑）。なんか知らんけど。

男性　そりゃやっぱりそのように生まれて来てるんですもんね。

法主　そんなこと言うてたらお父さん心配してはんで。

男性　ちょっと理解出来ませんけど（笑）。

法主　やっぱり世間並みの常識を持ってやらなあかんねん。お父さんの仕事を自分が本当にやっていくとかね。

男性　法主さん全てご存知なんですか。父がそんなこと言うてましたですか。

現在意識と潜在意識

女性　3月に私の弟2人を50年祭に連れて行ったんですが、2人がものすごく引っかかるんですね。

法主　なんかあったら反対反対と言う？

女性　いったいこれどういうことなんでしょう。

法主　言うて見たら自分の肉体に別の人間が入ってるような感じや。この世に生まれてこの年になるまでの意識が現在意識やろ。受胎する前からの意識と、生まれて後の意識とひとつの肉体に入っとるみたいな。あんたの場合やと現在意識やったら、これをやろうと思うやろ。ところが生まれる前の意識がやめとけって反対しよんね。だからあんたの前（前世の人）の心はなんにでも反対したがる心やねん。

女性　そうらしいですけどね。

法主　これを自分で意識したらなあ、これはもう自分の心の中にあるひとつの垢(あか)やなと、反対反対と出て来んのは垢やなと思ったらええねん。出て来たら自分でそれを消すように思ったらええ。だんだん歳いくほど薄くなっていくはずや。それはなにも他所(よそ)から邪霊が出て来て言わしとんでもないねんで。

女性　病気なんかした時にね、一時はいろんなものが出て来てました。

法主　しんどいけどこりゃもう生まれつき持って来た自分の筋やと思わなしゃあないやん。せやけどまあまあなんとかこうして今日まで生きて来てんねんからね。あとしばらく頑張り。

女性　とにかく私も反省して行かないかんな。そういう気持ちがね、表にだんだん出て来たりしたらね、そういう気持ちが治まって来たような気がします。

法主　そうなるはずやねん。まあ普通の人でも迷うというのはな、潜在意識と現在意識のトラブルやねん、迷うというのはね。潜在意識がなかったら現在意識だけで全て解釈していけるねんけど

な。ところが前の奴が出て来よるからな。その潜在意識というのはそこの家の筋も関係して来るんねんで。先祖さんの関係とかね。そやからあんたとこの場合やったらなんでもかまわんから反対するようなね。

女性　現在意識で考えたら、かけ離れているやろうにね。どうしたら浄化出来るんですか。

法主　そんなんまあだんだんそれなりに接近して来るやろうけどな。ここで見てたらふたつの心を持ってるからな、それでみんな苦しむ心が出て来る場合がある。

　人間の奥に欲を持っとるやろ。例えば道に財布落ちとったらやな拾うかどうしようか、きっと人って大抵そんなこと思うんや。警察へ持って行こうかと思う反面、こんなん拾っても格好悪いからやめとこかとか。それが現在意識と潜在意識や。現在意識やったらそんなもん盗んだらいかんねんしね。誰もおらんからもろとこかと思う欲望の心が出て来よったりな。

男性　迷いの心。

女性　社会的にそこそこのお方でも、しょうもないことで自分を潰してるようなことが新聞かなにかに出て来たりしてます。そういうもんの動きが出て来て、分らんと叱られてしまうような場合もありますよね。

男性　潜在意識というのは過去にどんだけ遡ったらええのか分かりませんけど、それが人生の岐路に出て来たりする。社会に対しての認識でもみんなコンピューターみたいにすぐ「ＯＫ」という答えが出たら迷いもない。それがいつまでも決断せんと、ああでもないこうでもないと、潜在意識と現在意識が押し合いしているようではあかんのですね。

法主　こういう禊会というのは潜在意識と現在意識が仲よく一緒になるようなひとつの訓練やねんけどね。

男性　法主さん、現在意識と潜在意識、どちらがリードするんですか。

法主　やっぱり潜在意識の方が強いかも分からんな。潜在意識と合うような現在意識をつけて来る家庭に生まれるとか、そんな血筋に生まれるとかな。そこには両方に縁があるねんけどな。

男性　人生でこれはやるべきかやめるべきかという判断する時に、現在の今の意識に過去に得た知識を嵌めたりね。人生を誤らんようにするとか、自分で生きていくということになるんやけど。

地縁や家筋の因縁

法主　もうひとつ奥の話になるけどな、どこかでひとつの家筋があって、それでまたひとつの因縁ある場所があったとして、そこで受胎する時にな。具体的に言うたらやな、昔ここに左甚五郎が住んどって、そして左甚五郎の魂がこの場所にあると仮定するわな。後々にそこに住まいする人がいて、そこで受胎した時に左甚五郎の心が潜在意識としてポンと入りよった場合にな、そこで生まれて来た子が手先が器用やし頭がええわな。そしたらそういうような頭のええ家筋にきっとなるはずやねん。

男性　そこに住むという縁というのか……。

法主　縁やねん、これ地縁やねん。そうした時に自分の現在意識として頭のいい子が生まれて大きくなって来たら、あんまり勉強せんかったかて頭ひらめく。だんだん器用なこと考えていく。芸術家は全てそんな因縁のところから来るねん。私でもこんな宗教的な仕事せんならんいうのは、私が受胎した時に長曽根の本拠で生まれてるからな。昔の長曽根の頭を今の天皇家に政権を譲った時の大和側の人の心がな、頼むと言うて来る。そやから私こんな仕事せんならん。だから場所と家筋とそして生まれた子どもとかね、それが複雑な因縁が絡んで来てこんなことになんねん。私は一番嫌いやねん、こういう宗教みたいな仕事というのは。神さん拝んでどうだこうだとか、こんな仕事せんならんというのは自分で自覚したんと違うし。言われたのは17か18歳（※数え歳）ぐらいの時で、頭の中に「お前は一生宗教で行け」って言って来てね。宗教みたいなもんずっと嫌いで来た。

男性　法主さんはそうやって早くから意識させられて来ていたと、法主さんの背後からの声をキャッチしていたと。ところが法主さんの言われた通り、法主さんのような人生やったら１００年２００年前、いやまだもっと古い前から計画されたもんか、そういう流れのもんなのか。

法主　せやから結局この潜在意識というのは受胎した瞬間、まあ受胎さすのも霊界がさせよる。そこにおる自分のいろんな思いというものを、子どもに託し生まれて来るわけやわな。そしたらまた生まれた子ども自身が一生のうちにその仕事出来るような人間にちゃんと仕組んどんねん。私もこれと一緒や。

男性　考えたら3年や5年で出来る仕事と違いますな。

法主　せやから霊界人は戦争のことも分かっとんねん。私が戦争に行っとったら命あれへん。そんで命延ばそうと思って兵隊に行けないようにしたわけや。霊界がそうしたわけや。私、今自分で生きとんの不思議なくらいや。ところがまたな、それが因縁でなってるんやから。公立の学校は体力検査で撥ねられた。兵隊検査も撥ねられた。そりゃまあ結構なことや。そうかといって普通の人よ

り弱いかと言ったらそうやない。学校に行ってた時は、ずっと剣道やっとったからな。そんな弱い体であっても出来んねん。だから霊界人の仕事は神秘や。それで戦争負けてしもうたら「お前の仕事はこれからや」言われんねん。丁度35歳（※数え歳）の時やね。

男性　霊界の人は今日から50年100年先のことを見通してる者もおるし、大事な仕事は100年も200年も前からずっとレールに乗せている人もおるんですか。

法主　私なんかも若い時に宗教、宗教と言われても、小さいお宮さんとかお寺さんとかな、そんなとこで仕事するくらいのことしか思ってへん。17や18歳（※数え歳）の時に「お前は宗教人になんねんで」と言われたらね。ところが歳いって意味が分かって来たのは、長曽根本拠の大和の軍団やわ。長曽根比古側にいた大勢の人たちが、天皇家に対して恨みつらみの心を持っている。それは日向から来た人が大和政権をとってしまいよってんからね。大和に元からおった人たちの恨みつらみが今までなおらなかったんや。

　昭和のこの時代になって、それを解消するような時期になって来た。私に託すようになって来た。大倭の聖歌にある「昭和維新の人柱」はそれやねん。古代の大和の長曽根の一族と日向の一族とが手を結ぶのが昭和維新です。霊界人の話やけどな。

　私が青森に行った時でも、長曽根比古のお宮さんがあんねん。大和の軍団がみんなバラバラになった。出雲の千家（※祭祀を司る一族）の系統の中にも、長曽根比古の系統の人が入ってんねんから。長曽根一族はあっちこっち全国に散らばってんねんわな。それが昭和の今の時代になって来て、現在の天皇家と長曽根とが手を結ぶのが昭和維新や。そういうことを言われたのやけれど、その時分は分らんかった。ここの宗教は信者を作る必要もないのは、そういう意味を言うわけや。そんな大きなものがある。

男性　法主さんはよう源平同士とか、源平の話をしよりますが。

法主　源平一族が現在社会の霊界において罪を作ってんねん。大倭神宮でその罪を解脱させるのが私の母親の役目。まず身近なとこから浄化していくというのが親の代や。私の代になったら2000年も3000年も遡って長曽根時代のことを私が掃除せんならん。そういうようなこともあるねんけどな。こんなこと普段あんまり喋らへんねんで。まあ聴く人がおったらするけどな。これはまあ因縁話なんやけどな。

男性　三輪の出雲も長曽根比古の一族ですか？

法主　あるいはそうかもしれん、分からんけどね。稲田姫の命さんが大倭神宮のあの場所で亡くなっている所を見ると、どうも山陰の出雲は大和から行ったような気もするけどな。それも歴史的にはっきり分からん。

男性　ことすごく関係があったんですね。

法主　日向の軍団が大和へ出て来る以前は、近畿地方全部長曽根一族が治めとったとこやねん。神武天皇が熊野から入って来る時に、かなり抵抗している所を見たら、長曽根比古の勢力というのは熊野から近畿地方や紀伊半島まであったんやね。そやから今の島根の出雲というのは、大和から向こうへ行ったのかも分からんけどね。けれど素戔嗚命は出雲からこっちへ来てんねん。まあ始めは韓国（※朝鮮半島）やと思うけどね。

男性　出身は韓国の人？

法主　韓国人やと思うよ。あの人は今の韓国から現在の出雲に入って来てんねん。日本の領土に入って、結局この大和へ来てんねんと思うけどね。

　山陰の海は非常にきれいな藻が多かったらしい。あそこは入り海になってるやろ。それで「いつ」というのは神聖という意味で、厳格の「厳」という漢字で書いてんねん。神さんの建物は「厳の宮」なんやけどね。山陰のとこは藻が非常にきれいやったんで「厳の藻」で「厳藻」。ここの三輪は八岐大蛇の伝説があるように、しょっちゅう龍神さんのおる所やから雲が出てくんねん。それで三輪さんの方は出る雲やから「出雲」やねん。ところがいつの時代か知らんけど、大和から向こうの人との交流が始まって、向こうが「出雲」になってしもうてん。

こだまことだま

非武装中立を考える

▼東京都町田市　重永博道

　拝復　お便りと『おおやまと』6月号ありがとう存じました。巻頭の法主さんのお話、面白いですネ。いろいろ教えられるところ大です。ただ今日のような社会状況になると、「武器など持つのは構わへん」というのは軍拡競争をますます助長するようで、一触即発を招きかねません。

　私は最近、非武装中立ということを考え始めました。アメリカの横暴、日本の高齢少子化社会、そして自然災害や人災など、これから新たに作り変えていかなければならない費用は莫大なものです。ここで防衛費（軍事費）をなくして、日本が中心になって非武装化し、世界と連帯していく道は夢の話ではなく実現できるのではと。その意味で、今具体的に軍事費がどのように使われているのかの検証から始めなければなりませんけどネ。

　暑さますます厳しき折、ご自愛のほどを！

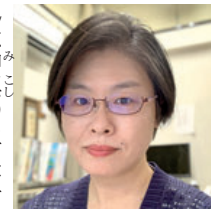
（山脈の会）

新シリーズ「私と大倭」（第３回）

味の世界を知って

永仮　まゆり

喜びは深く大きく



先日、実家の母が、携帯電話で撮影した30秒ほどの短い動画を送ってきた。動画には、昨年10月に生まれた甥っ子の茜（男の子）が、ねじり鉢巻きに法被姿のお兄さんに抱えられる姿が映っている。お兄さんは神輿の上に立ち、抱きかかえた茜を祭りの観客に見せながら、大声で「茜君です」と紹介。「茜君が元気にすくすくと育ちますように」と発声した後、神輿の担ぎ手たちの「ソイヤ」「ソイヤ」という掛け声とともに、茜は5回高く掲げられた。

これは、今年の7月、鹿児島の祇園祭で行われた「稚児上げ」という伝統行事だ。終始泣きわめいていた茜だったが、掲げられた瞬間、チョッと泣き止み、「あれ？何が起こっているの？」といわんばかりの素の表情になった。それが面白かった。奇稲田日女命と建速須佐緒命を祭神とするお祭りで、甥っ子が地元の人たちに祝福を受けた。私にとっては、これまでの大倭との関わりがあってこそ、より一層、深い幸福として感じられるのだ。

大倭との出会いとこれまでの歩み

私が大倭紫陽花邑にご縁をいただいたのは、法主様が帰幽された4年後の２０００年11月になる。以来、折に触れ、現界ではお会いできなかった法主様の存在と、法主様を師と仰ぐ紫陽花邑の方々との関わりや機関紙『おおやまと』を通じて、気が付けば大倭が私の大きな支えとなった。この25年は、振り返ると、私にとって浄化の時だったように思う。浄化とはとても曖昧な表現だが、一言でいえば、私自身と私を取り巻く空気が明るく晴れた。以前は、もっと私自身と、私の周りに取り巻く空気が重く、籠ったものがあったように思う。

大倭では、旧暦の7月15日に「東光大祭・祖霊祭」が執り行われる。普段はなかなか会うことができない霊界人たちが、唯一この日だけは、お互いに会うことができるという。法主様のこの言葉に導かれ、先祖さんの供養になると思い、妹（あづみ）と祭りに参加することが恒例になっていった。先祖をはじめ、有縁の諸霊を霊界の法主におつなぎすることが、気が付けば当たり前になっていった。

霊界人との関わりから学ぶこと

霊界には明るいところと暗いところがある。これは杉本順一さんから教わったことだ。私が今関わっている霊界人の一人は、死んだ後に、生きていた時の苦しみや後悔の心に苛まれている様子だ。その大きな原因となっているのは、「宗教は生活のなかにある」という大倭の根本の教えを、生きていた時に自覚できなかったことにあるらしい。このことを先日、妹のあづみに話したところ、「生活のなかに宗教があることが自覚できないって、一体どういう心のことをいうのか」と問われた。そこで、二人でこのことについて話し合ってみた。宗教が生活のなかにあることを意識できないというのは、詰まるところ、生きている時に「我」の心のみを積み重ねてしまった、ということではないか。権力やお金、成功のイデオロギーなど、暴力が優勢となっている世の中に埋没して、自分の心を向上させることの重要性を自覚できなかった、ということ。私たちの最終目的は、死んで霊界に還るまで、この世で自分自身の心の向上に努めることだ。それは生活の場でしかできない。そういったことを確認するように、お互いに話し合った。法主様の言葉をお借りすれば「千町の堤は蟻穴より破る。千里の行も一歩より始まる」の重みを噛み締めている。

和光、命

大倭には、苦しみの果てに「和光」に届いた霊界人の姿から得る学びがある。霊魂の慰霊・鎮魂を目的とした「大倭文化行事」がそれで、『おおやまと』紙上に載った体験談や、邑人の話から教

わることもある。そもそも、大倭の聖歌「くにのもと」「黎明大倭」は神倭磐余彦尊と長曽根日子命の霊示であり、聖歌の意味がわかれば、大倭のことがわかるともいわれる。日本の歴史の真実は、一般的には表に出てこない、長曽根日子命の思いに秘められていることは、法主様の著作に詳しい。このような内容を知識やイメージとしてではなく、霊界の「味の世界」として受け止めたのは、平成30年の暮れに訪れた御所市・神武天皇社の別社に祀られる吾平津媛との出会いだ。後日、杉本さんや林修三さん、私たち姉妹で再訪したことは別稿（令和元年10月号こもれる魂魄の地を訪ねて第49回）で述べた。今回、あらためてこの原稿を書くにあたり、『やわらぎの黙示』の134頁～137頁「大和維新」を読んだ。長曽根日子命が狭野命（後の神倭磐余彦尊）のもとに示した、天啓に基づく7つの申し入れのひとつに「一、正妃は大倭から冊立し、吾平津媛は退けること」とある。「狭野命はこの申し入れのすべてを無条件にて受諾することになった。妃吾平津媛の心境は誠に悲痛なものがあった」と法主様は記述されている。

ところで、大倭では、霊界から現界に生まれ出てくるときに与えられた役目のことを「命」という。法主様は「鏡は容貌を見せ、酒は心裡をあらわす。命は（みこと）は生涯の足跡にあらわれる」といわれる。この世で自分はどのようなお役目を果たすのか。これは皆が悩むところかもしれない。

話は少し飛ぶのだが、私は将来の夢や目標が持てない子どもだった。昨年、大倭で開かれた「ミニ賑栄い塾」という集まりで、杉本さんや野本三吉さん（加藤彰彦先生）、出口三平さんから、子どもの頃の〝不思議体験〟について伺う機会があった。テストの答えを見えない存在から見せられる、とか、世界が真っ暗になるような死の世界の恐怖に苛まれるとか、「子ども時代って個性が出るものだな」と妙に印象に残った。

翻って、私はどうだったか。思い出すのは5歳くらいの頃、母親の自転車の後部座席に座っている時に雨が降りはじめた。母から雨を止めなさい、という意味のことをいわれたので、念じたら止んだ。この程度だ。もうひとつ、不思議とは少し違うが、なぜ自分がそういうことに夢中だったのか、気になることがある。小学校低学年のある時期、私は毎日、クラスのメンバーのことを考え、仲良くすること、和をとることに生き甲斐を感じていた。その時、とくに私自身が何か人間関係に困っていたわけでも、誰から頼まれたわけでもない。ただ、なぜか毎日寝る前には、翌日のクラスの和のとり方を考え、そのことに夢中になっていた日々があった。もしかすると、これは私の「命」に関することを、子ども時代に体験させられたのではないか、と思うことがある。大倭では霊界の「和光」が信仰の対象となっており、法主様の教えの究極は「仲良くすること」「腹の立たない人間になること」だ。これからも私の人生のなかに、和のとり方を考えなければいけない場面が自然と出てくるような気がする。

伝えたい思い

私は今、ひょんなことから、編集記者の世界に足を踏み入れた。日々、地域経済、離島振興をテーマにした雑誌の編集に追われている。言葉と文字、人との関わりのなかで、激しい修行をしているような気もするが、人と関わること、知ること、伝えることは根本的に楽しい。有難い仕事に就かせてもらったと感謝している。なかでも、全国の地域紙の編集長や記者に取材するコーナーは面白く、やり甲斐を感じている。地域紙とは、全国紙や県紙、ブロック紙より、さらに小さな市町村などローカルなエリアの情報を扱う新聞で、地域の個性に溢れている。昨今、インターネットの普及や新聞離れによる発行部数の低下から、新聞は斜陽産業といわれているが、情報を正しく伝えることの意義は変わらない。

大倭では柴地則之さんが新聞学を学ばれていたと聞く。法主様は動画撮影やテープ、写真などの記録、印刷による情報発信と保存に力を注いでおられた。『おおやまと』紙の編集に命を懸けた岸野春子さんをはじめ、今の編集部の皆さんのお陰で、大倭の核となる情報が私たちに伝わっている。『大倭』『すさのお』『おおやまと』紙には重要な情報が詰まっている。ぜひ多くの人に読んでいただきたいと思う。

最後に、この原稿の依頼を受け、あらためて『おおやまと』のバックナンバーを読み返した。法主様の法話のなかから、今の自分にとって一番難解な言葉を抜粋してみる。「本当の信仰はどんなものか、神さんってあるのかないのか、どれがほんまの神さんやとか、自分に問うて自分の心の中にあるほんまの御本尊をつかんでほしい」「つかんだ暁には『あれ？これは自分であった』と最後にわかる。自分を自分が信仰しなければ信仰する対象がないはずなんです」（令和6年6月号）と。

大倭は私にとって大きな支えであり、成長の糧であり、感謝の源だ。この思いを、できるだけ多くの人とわかち合いたい。

法主・言の葉

根拠なく信じるのは盲信である。
盲信は利害によって左右されやすい。

令和7年6月28日～29日

こもれる魂魄の地を訪ねて（第56回①）

はじめまして、霧島

大倉有宏

話の流れで先日一週間ほどかけて巡った九州旅行記を3回ほどに分けて書くことになりました。そもそも私のことをご存知いただいている方が、どれくらいいらっしゃるのだろうかと思いますが、私はお腹の中にいる頃からずっと大倭に心の結び付いてきた人間です。大倭の祭典には幼児の頃から参列しているので、現地に頻繁に来られている方とはそれなりにお付き合いがありますが、遠方の方とはあまり面識がないので、突然誰だろうと思われるかもしれませんが、本紙の編集部におりますので今後ともよろしくお願いします。

今回の九州旅行は新婚旅行であった。いくつか妻からの候補地があった中で、以前よりそろそろ九州に行きたいと思っていたので九州を選択した。5月上旬のある日、妻から「職場の規則で新婚旅行の休暇は半年以内に取らないといけない」と聞く。「いつにしようか」と問われたところ、ふと「6／28霧島」と文字が出てくる。

霧島神宮　古宮址天孫降臨神籬斎場

こういう巡拝のようなことは数年前から定期的に起こるようになり、色々と散々に神秘的なことは経験してきたので、自分の感性にはまだ拒否感を持っているものの、巡拝に関する感性に関してはものすごく素直な状態になっている。何も考えずにそのまま妻に伝える。

妻は「えー梅雨ちゃうん」と言う。たしかにそう言えばそう。しかし巡拝に呼びつけられるときは天候その他は全て都合よくなることは常のことであるので「全部どうにかなる」と回答。妻も私との旅で分かっているので特に反対なし。6月28日鹿児島着のフェリーを予約した。

6月27日出発当日を迎えた。テレビをつけると「6月27日九州で観測史上最速の梅雨明け宣言」と流れてくる。妻と目を見合わせる。それどころか、霧島での噴火も報じられていた。やはりこういうのは何かあるのだろうか。

出発前に大本宮と神宮に挨拶に参る。奥津城では「気を付けていけ」と念声（※念が声となったもの）の心地（ここち）。そこかしこの土を少量貰って行ってみることにした。大阪の乗り場から九州へと旅立った。旅程は直感のままにある程度決めておき、一部はゆとりを持たせておいた。

志布志（しぶし）港に到着。6月28日霧島への挨拶から入れという心地であったので、まずは急ぎ霧島へと移動。霧島の中でも霧島神宮に呼ばれているのだろうという心地。古い祭祀場に先ずは伺ってみたあと、霧島神宮へ。まあ何とも綺麗に整備された空間。私は幼小の頃から、整備されているほど、神社の本質から離れる勿れと反動的に思うものがあるので、こんなところに何があるというのだろうと現在意識は思ってくる。

形式上の本殿前に一応伺って、身を任せてみる。特に何もない。やはりここに呼ばれているのではないのではないかと思いながら、少し離れた山中を歩いてみるが、そこでも特に強いものがあるわけではなかった。呼ばれていたのは気のせいであっただろうかと、帰りますよという挨拶がてら再度本殿前で、小声で祭祀。すると猛烈に本殿に吸い込まれそうになってきた。

後ろから本殿へ向かって電磁波の線みたいなものが膨大に伸びていて、その線に沿って浮き上がり、本殿にそのままスーパーマンのような格好で飛んでいってしまいそうな心地というのが正確な表現。気のせいなどではないほどの強烈な力を感じ、身体がどんどん公衆の面前で傾いていく。このまま放置したら本当に浮いてしまうのではないか、賽銭箱をのけて本殿に上がり込んでしまうのではないかと感じると、怖くてそのままなどできない。なんとか現在意識で封じ込めてみたが、とっとっとと三回ほどそのまま前進してしまった。さすがにこれ以上は無理ですと霊界に伝え手をほどいて階段を降りた。一体何だったのだろうか…。妻は後ろから押してみようかと思ったらしい（笑）。

初めての経験ではなかった。先日も崇神天皇陵で同じことになったばかり。気のせいかと思っていたが、今回はあまりに明確であったので恐怖すら感じた。旅から帰って、真っ先に杉本さんにお聞きしたら、話し始めてすぐに「それ僕もようなるねん」とのお話。霊人がこちら（その背後にある大倭霊団など）と一体化したいという反応が身体に出るのではないか等色んなお話を聞いた。自身でもそのような感触であったので、頭が狂ってしまった訳ではなさそうで安心。訳は知らないが、やはり霧島神宮にいる何かしらの霊人に呼ばれていたのだろう。

旅の始まりからいきなりこの様子であったので、どうなってしまうのだろうと思いながら一週間の長旅が始まった。

あじさい日誌

7月8日　午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

7月11日　大倭大本宮拝殿のエレベーターの定期点検が行われました。3週間ほど前からの微かな異常音もなくなりました。

法主さんは「機械は音でもの言いよる」と思い出しました。

7月13日　午後2時から大倭拝殿において大倭会主催禊会が開かれました。

7月15日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

7月20日　参議院議員、奈良市長、奈良市議会議員選挙が行われました。

午前10時半奈良市の佐久間裕樹さんに案内されて小田謙太さん、隠田晃さんが来邑され杉本順一さんと歓談されました。

7月22～24日　福井の齋藤正宏さんが、大倭出版局にある法主さんに関する映像の長期保存のために、パソコン等の機器をチェックしてくださいました。

7月23日　午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が行われました。この日は昭和40年7月23日の月次祭の法話をお聞きしました。

午後4時から大倭会館において大倭会役員会が開かれました。出席者全員の近況報告の後、東光大祭・祖霊祭の準備、一泊文化行事、文化講演会等について話し合いました。

7月29日　午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

8月2日　午後6時から大倭会館で大倭町自治会役員会が開かれました。

8月3日　交流の家に山陽放送のスタッフが来訪。歌手の加藤登紀子さんの番組を製作中で、亡き夫の藤本敏夫さんが参加した交流の家建設運動などについて取材を受ける。湯浅進さんが応対。8月20日に山陽放送で放送予定とのこと。

8月5日　午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

8月6日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

広島原爆の日。午前8時15分、拝殿の大太鼓が中島健さんによって打ち鳴らされました。

午後6時半から大倭会館において邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

7月24日　予定していた第2回新入職員研修会は久々にコロナウイルス感染症予防対策のため中止しました。

（菅原園）

7月7日　七夕の集いを行い、それぞれ書いた短冊を読み上げたり、七夕のイメージのゼリーを食べたりと楽しみました。

7月15日　中庭でシャボン玉遊びを楽しみました。

（須加宮寮）

7月5日　利用者と職員で、短冊に願い事を書き笹に七夕飾りをしました。

7月15日　書道クラブで奈良県心身障害者作品展に向けて、お手本を見ながら練習しました。

（長曽根寮）

7月1・4日（デイ）　作品づくりで利用者の皆さんとスイカのオブジェを作りました。

7月7日（特養）　フロアにて笹に貝飾りや短冊の飾りつけを職員と一緒に行いました。

（茂毛路園）

7月7日　昼食時、七夕素麺という七夕にちなんだメニューを頂きました。スイカを見て「夏やね～」との声が出ました。

7月29日　月1度のご当地グルメの日。広島県のメニューを頂きました。メインは広島風お好み焼き、デザートでは揚げもみじ饅頭で広島に旅行した気分を味わってもらいました。

東光大祭　祖霊祭　祭典のご案内

令和7年9月6日(土曜日・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。
正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の間、拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等をご用意します。

※9月6日10時30分より大倭神宮の月次祭が行われます。

大倭会文化講演会

日時　令和7年11月9日(日)
午後1時～3時30分（開場12時30分）

場所　大倭拝殿　　入場無料

講師　盛口（もりぐち）　満（みつる）　氏
（沖縄大学文学部こども文化学科教授）

「沖縄から自然と人間のあり方を考える」
～ 学校という場で僕が教わったこと。ものとひとの歴史 ～

自然の力と私たち人間のあり方を一緒に考えたいと思います。特に近年の酷暑と局地的な大雨など地球の環境で、人にとって自然との関係は、かつてどうであって、今、どうなのかなど興味深いお話をしていただきます。

プロフィール:1962年千葉県生まれ。千葉大学理学部生物学科卒。自由の森学園高校の理科教師として15年勤務。2000年に沖縄に移住。教員のかたわら、自然に関する一般向けの本を書いている。現在、沖縄大学文学部こども文化学科教授。主な著書に『めんそーれ化学』(岩波ジュニア新書)、『沖縄の生き物』(中公新書) など多数。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）
9月6日(土)　午前10時30分より大倭神宮にて。(時間注意)

＊東光大祭及び祖霊祭
9月6日(土)　午前11時30分から東方の碑、正午から拝殿にて（上記参照）

＊大倭会禊会
9月14日(日)　午後2時より大倭拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）
9月15日(月・祝)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大倭大本宮）
9月23日(火・祝)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

表紙の押絵について

長年紫陽花邑で毎月開いている押絵教室の先生である髙濱道子（峰寿）さんの作品です。